

教育目標: ○自ら学び、よく考える ○進んで協力し、他人を思いやる ○心身ともにたくましく、最後までやりぬく 目指す学校像: ○生徒が主体的に学び活動する学校 ○教職員が協働して教育活動を創造していく学校 ○保護者や地域社会から信頼される学校 目指す児童・生徒像: ○自ら学びよく考える生徒 ○進んで協力し他人を思いやる生徒 ○心身ともにたくましく最後までやりぬく生徒 目指す教師像: ○教育に対する熱意と使命感に富む教師 ○一人一人の良さや可能性を引き出せる教師 ○研修意欲に富み互いを高め合う教師

領域	中期目標	短期目標	具体的方策	努力指標	努力指標	成果指標	成果指標	分析コメント	改善策
				(中間)	(最終)	(中間)	(最終)		
豊かな心と社会性	豊かな人間関係を育むとともに、命の大切さと人の心の痛みが分かる生徒を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> 主体的な教育活動を通して自己肯定感を高め、いじめや不登校を防止する。 道徳の時間を「自分なりの答え」を見出す時間とし充実を図る。 社会的能力(「自己表現力」「自己コントロール力」「状況判断力」「問題解決力」「親和的能力」「思いやり)を高める。 	生徒一人一人のよさを見つけ、認め励まし伸ばす指導。三中いじめ防止基本方針に基づいたいじめ防止と対応を図る。	3 87.5%	4 100%	4 100%	4 100%	教員は生徒一人一人の様子を確認し、認め励ます指導を行い、コンプリメントに心がけている。また、いじめ防止基本方針に基づき、いじめはあつてはならないという姿勢をもって、共通理解のもと教育活動ができていいる。アンケートや教員の認知により解決に結びついている。	今後も生徒の良さを見つけ、またコンプリメントを継続し生徒の自己肯定感を高める指導を行っていく。情報共有については学年間だけでなく、学年を超えた共有もさらにすすめていき、いじめの早期発見、未然防止に努めていく。
			「特別の教科 道徳」は、指導方法を工夫し、「考える道徳」「議論する道徳」を推進する。評価は、生徒の良さを認め意欲につながる評価を行う。	2 75.0%	4 100%	4 83.8%	4 84.9%	「意欲的に取り組めた」とする生徒は、86.0%、「自分なりの答えを見出すことができた」とする生徒は、86.0%と比較的高い結果となった。また「自分の意見や考えを発表したり、伝えたりすることができた」とする生徒は、82.9%と若干低くなったが、中間評価よりも数値は高くなった。学年道徳やローテーション道徳などの取り組みが成果として表れていると考える。	学年道徳やローテーションでの授業など指導法の工夫は今後も継続していく。また評価に関する研修を深め、生徒の良さを評価し意欲的に生徒が取り組む授業を目指していく。今年度は話し合い活動などがコロナ対応で十分にできない面があったが、来年度導入される一人一台のタブレットを活用し意見を出し合うなど文字による対話も取り入れていく。また学年通信等で道徳の授業の様子を発信しているが、さらに学校全体ですすめていく。
			教育活動の様々な場面で、それぞれの教員の持ち味を活かし、生徒の社会的能力を高める指導を行う。	3 87.5%	4 100%	4 84.0%	4 84.7%	社会的能力が高まったとする生徒は84.7%と中間評価を上回る結果となった。また社会的能力を高めるため、各教員の持ち味を活かした様々な取り組みも見られた。	それぞれの教員の持ち味を活かした取り組みを継続し、社会的能力の向上を図っていく。また、社会的能力には生活の基本習慣という面もあるので、規律を守る指導も併せて行っていくことが必要と考える。
確かな学力	基礎力、思考力、実践力をバランスよく育み生徒一人一人に確かな学力を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な知識や技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、学びに向かう力を高める。 	授業のユニバーサルデザイン化を図り、分かる授業をすすめる。考えさせる授業、理由を示しながら自分の考えを表現させる授業など、学習活動を工夫する。	4 100%	4 100%	4 85.4%	4 84.5%	「授業は楽しくわかりやすい」84.5%と中間評価よりは下がったが、昨年度の最終評価79.4%を上回る結果となった。授業のためあての提示やICT機器の効果的な活用など授業のユニバーサルデザイン化については、教員の意識は高くなっている。また授業でのICT機器の活用には、教員も生徒も慣れ活用が普通になってきていることも高評価につながったと考える。	授業のユニバーサルデザイン化については今後も推進していく必要がある。また、理由を示しながら自分の考えを表現させる授業など発表活動が十分にできない部分があったが、来年度に向けてタブレットを活用したプレゼンテーションや考えの共有などを行う授業をすすめていく。
			朝読書、質問教室、補充教室、サポート教室等を実施し励ましや肯定的な声かけ等、個に応じた指導を充実させる。	3 83.3%	4 92.0%	4 85.6%	4 85.6%	質問教室やサポート教室等で個に応じた指導はある程度できている。基礎的・基本的な知識や技能を身に付けられたとする生徒は昨年度の最終評価75.5%から今年度85.6%と高くなっている。肯定的な声かけについても教員は意識して行っている。	今後も質問教室、サポート教室の取り組みを継続していく。サポート教室は、希望の生徒が多く時間数増を希望したい。来年度に向けて、一人一台のタブレットの活用で個に応じた指導をどのように行うか研究が必要である。朝読書の取組に温度差があるので、指導の共通理解を図っていく。
学校居心地感	生徒の学校居心地感を高める。	生徒の心の居場所、生徒同士のきずなづくりの場所のある環境づくりをすすめる。	生徒の実態を把握し困難さに応じて様々な工夫や手立てを講じる。教科の学習、行事、部活等様々な場面で生徒の学校居心地感を高めるアプローチを行う。	4 100%	4 100%	2 82.8%	2 84.3%	昨年度の最終評価での生徒の学校居心地感への肯定的な回答は82.6%、今年度は84.3%となった。今年度は例年にはない状況下ではあったが、居心地感が高まったことは成果と捉えている。評価指標の値は2であるが、来年度に向けては指標の数値検討も課題である。	学校居心地感の低い生徒に対しては、個別面談等を活用し相談活動を充実させていく。生徒が落ち着いていた環境で過ごせるよう教員が統一した指導を行うこと。生徒には横のつながりに役立つコミュニケーションのとり方について学ぶ機会も必要である。また、校内研修でも生徒の自己肯定感を高める指導について継続して行う必要がある。